

# 沖縄

—— 自然の力を借り文化を生む

沖縄といつてすぐに思い浮かぶのは手つかずの自然かもしれない。けれどそれ以上に魅力的なのは、自然と共生しようとした人々の自然を敬い、愛する気持ちやそこから生まれた特有の文化にある。西表島で交布を織る染織家の石垣昭子さんを訪ねる。古来から変わらぬ、人と自然との真のかかわり方がそこにはあった。

取材・文 木内 昇 写真 谷山 實



沖縄・西表島の紅露工房を訪れたのは、ちょうど「浜うり」の日だった。一年でもっとも潮が引く日、島人たちは仕事を休み浜に行き、漁をしたり海で遊んだりして一日を過ごす。工房を主宰する染織家の石垣昭子さんはこう言う。

「旧暦の三月三日に女の人が足を海水につけると一年健康でいられる、という伝承が『浜うり』の行事なんです。この島では今も旧暦で動いているんですよ」

琉球列島に伝わる「ニライカナイ」という言葉がある。大和言葉でいう常世の国、つまり仙境や黄泉の国という意だ。旧暦に定めら



れたハレの日は、このニライカナイから生命力が招き寄せられる特別な日とされてきた。浜うりも、生命力に満ちあふれた砂浜に行き、枯渇した魂を潤すためのもの。島の人々にはるか昔から自然と深く接し、そこから命をいただいていた。

石垣さんが日々向き合っている交布の作業も、この島の自然と親しく結びついている。交布というのは、例えば縦糸を糸芭蕉に、横糸を絹にといった具合に縦糸と横糸を異素材で織ったもの。縦横とも同じ素材で織った上布とは異なる独特の風合い、感触がなんとも心地よい。交布はいくつもの工程を経て作られる。糸芭蕉から糸を紡ぐまでも、糸芭蕉の輪層になっ

た皮をはぎ、繊維を削ぎ出す「口割」、繊維を灰汁で煮て不純物を取り除く「苧炊き」、パイという道具でしごいて糸にする「苧挽き」、糸を水でしめらせて細くより合わせながら一本の糸にする「苧績み」と、手間がかかる。できた糸をフタ巻きといって細い竹の管に巻き付けたものを織っていくのだ。布を染めるのも紅露、福木、藍といった根や枝などを煮出した染料。すべて自然素材から得ることができ

る。沖縄諸島にはどの島にも織物文化がある。一七世紀、琉球王府から課せられ人頭税を布で支払うため、いつしか織物は島の女たちの生業になっていった。琉球王家には織奉行、染奉行があり、宮古は宮古上布、八重山は八重山上布というように島ごとにデザイン、つまり絵図を課せられていたという。それら独自の文様を、雨の日や夜など農業の合間に助け合いながら、女たちは織り続けた。

「上布を王家に納めるでしょ。自分たちはその残糸を日常着にした。そこから交布が生まれたんです。余ったものを工夫した女性たちの知恵だと思えますね」

## 当たり前前に代々伝わる織物仕事としての意識はなかった

石垣さんは、西表島の隣に位置する竹富島に生まれ育った。幼い頃から織物をする母や祖母の姿を日常的に見てきたという。

「ただ、私が学生だった六〇年代は、島を出て一旗揚げるのが親孝行と考えられていた時代ですから、とても地場産業に目を向ける気にはなりませんでした」

石垣さんも東京の女子美術大学に進学した。在学中に偶然、目黒



工房に近い汽水域は海水と真水が混ざり合う場所。マングローブの木々が美しいここで海晒しを行う。



紅露工房は海に近い静かな場所にあり、吹く風が心地よい。全国から石垣さんの技術を学ぼうと研修生がやってくる（下）。



黄色は福木で、群青は藍で色を出す。目が覚めるような色が植物だけで出せることに、自然の力強さを感じる（上）。石垣昭子さんは仕事をする上でも「ストレスを溜めない。気持ちいいのが一番」。だから長く続けられるのだらう（左上）。ピンクは紅花。福木と藍を混ぜて作る緑は出すのが難しいと言われている色（左）。

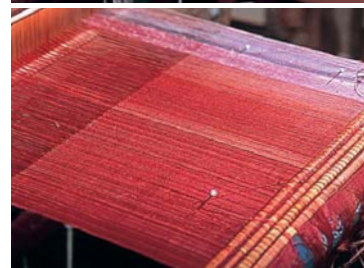


区駒場の「日本民藝館」の芭蕉布の展示品を見た。普通に家にあったものと同じものが展示されていた。

「それは衝撃ですよ。大変な技術だったんだ、と。島では当たり前すぎて、気がつかなかったでしょうね」

それでも石垣さんは、「織物なんて古くさいことを仕事にしようとは思わなかった」。東京が好きだったし、都心が性に合うとも感じていた。大学卒業後もそのまま東京で就職する。

「そのままずっと東京にいたつもりだったのですが、身体を壊して島に帰ったんです。島には産業もないので織物をするしかなかった。仕事というより、時間があまるので仕方なくでしたね」  
時はちょうど一九七二年の沖縄本土復帰直後



苧績みの作業を経て、糸が生成される（上）。紅花で染めた縦糸に白い横糸を通して模様。色と模様の組み合わせで多彩な種類に（中）（下）。

で、竹富島にも多くの観光客が訪れた。布を織っていると、人が並んで見るほどの盛況ぶり。京都民藝協会が見学に訪れたのもその折で、石垣さんの布をひとりの女性と一緒に染めることになった。それが、今は人間国宝となった志村ふくみさんだった。石垣さんは志村先生の作業を見て、大いに感じるところがあったという。はじめ

て「これは仕事にすべきものかもしれない」という意識も芽生えた。すぐに「押し掛け同然」に京都にある志村先生の工房を訪ね、そこで三年ほど修業することになる。

「織物というのはひとつの女の人の生き方だな、と志村先生を見て思ったんです。先生は『あなたには種を播く』とおっしゃった。そのときはわからなかったけれど、島へ戻ってから『深い言葉をいただいたんだな。じゃあ、発芽させないといけない』と思いましたね」  
技術は時間さえあれば修得でき

る、と石垣さんは言う。ただ最終的にそれがその人のものになるかというのは、生き方というのが大きいのだ、と。島に戻った石垣さんは、芭蕉布の第一人者である平良敏子さんにも師事し、その後独立して染織家としての道を歩みだした。

### 途絶えていた織物を 素材から再生して

石垣さんが竹富島から西表島に居を移したのは、西表島の文化伝承者でもある金星さんとの結婚がきっかけだった。

「三〇年ぐらい前です。当時、この島の織物文化は途絶えていたんですよ。『布なんて売れもしないものをどうする』と言われましたからね」

沖縄本島に次ぐ面積を持つ西表島は、戦前は炭鉱町として栄え、経済的に潤っている時期が続いたため、手間の合わない手仕事はす





べて放棄させられていたのだ。それでも島には必ず女たちの機織りの跡が残っているとさえ、島をくまなく散策し、廃村となった崎山村で糸芭蕉の群生を見つけた。これを移植し、糸にするに適した柔

らかい繊維が取れるよう手入れしたのが工房の周囲にある糸芭蕉の畑だ。

「芭蕉や綿の育て方は『八重山嶋農務帳』という資料に細かく書かれていますから、方法は伝えられています」

この資料、なんと一七世紀、琉球王府時代のものだという。そこに書かれた農法が今に活かせるということは、島の土壌がほとんど変わっていないという証。おそらく工法も昔から伝わるものを活用しているのだろう。八重山諸島に伝わる「うりずみこゑにや」という歌には、芭蕉布の生産工程が歌われている。

「まきちやなかひ巻ちゆけて 布機に置ちゆけて 白糸びやかけて 赤糸びやかけて いなやうかしちうちゆさ（巻板に巻きつけて 布機に置きて 白糸の綜統に掛けて

水田に沿ってある糸芭蕉の畑。糸芭蕉の繊維は麻より固く、丈夫で風通しもいいため暑い沖縄の気候には適している。三年ほど経った木を倒し、皮をむき、中の繊維を細く割いて乾燥させる。茎の間から出ているのは新芽。芭蕉の木は次の命を植え付けてから刈り取られる。芯の部分はゆでて酢味噌あえにして食べられるなどムダになる場所が一切ない。

て 赤糸の綜統に掛けて 早やもう織りはじめたよ」

沖縄に古くから伝わる歌には、暮らし方や仕事の智慧や方法が巧みに織り込まれている。歌を作った昔の人が見ていた景色と、今にその歌を受け継ぐ人の目の前にある景色があまり変わっていないのかもしれない。沖縄の人が歌を愛するのは、先人たちと歌を通して精神を通わせることができるからだろう。

「たぶん自然が相手というのが変わらないんでしょうね。私もその日何をするかは、太陽と潮の満ち引きで決まりますから。都会では人間が主体ですけど、ここでは人間が自然に合わせていくんです。そういう生き方が一番気楽で快適ですね」

草木染めも複雑なことではない。糸芭蕉も三年ほど育って木が倒れる直前のものを刈り取る。そのときは新たな茎が育っているのので体系には問題ない。染めの作業も、化学染料など使わずとも旬の草木で染めれば素直な色になる。布を染めたあと色を定着させる「海晒し」も、海水と真水とが交わる汽水域で布をさらす。工程は多彩だが、自然の摂理を壊すようなこと

はひとつとしてない。最近では、こうした伝承の技術の科学的根拠を調査に来る学者も多いという。そこでわかってきたのは例えば、「海晒し」は布自体を中性にするためにも意味あることだということ。また、色と香り、つまり視覚と嗅覚で人はひとつの感覚を得るという研究もある。確かに季節の草木を煮出していると、心も体も心地よい、と石垣さんは言う。織りには人間の自然とのかかわり方が凝縮され、ひとつひとつの工程が人を癒しもある希有な作業だ。昔の人は暮らしの中から感覚でそれを生み出していたのだ。

「同じ材料を東京に持っていったもできないでしょうね。環境や水や光が色や素材に及ぼす影響は大きくて、それは科学でも簡単には分析できないかもしれない。そのためには八重山地域全体の自然を守っていかなければなりません。最近では、環境が最終的には人間の体にかかわってくるのがわかったので、世の中でも『エコ』とよく言われますが、自然は昔から全然変わらず、ずっとあるんです。自然から恩恵を受け、自分たちのルーツというのを確認することが必要でしょうね」





## 自然だけを保護するのではなく 人や動物を含めた循環を守る

石垣さんの大切な仕事のひとつに「節祭り」の衣装作りがある。節祭りというのは西表の祖納村で、旧暦の八月九月の己亥の日に行われる祭事。その前日がトシヌルと言われ、この日を境に節が改まると言われている。浜から白砂を運んで各家にまき、節葛という蔓草を農具や水瓶など大事な道具に巻き付ける。初日は「ユークイ」と呼ばれ、サバニ漕ぎ（舟漕競争）などが行われる。また狂言や踊り、歌でその日を祝う。石垣さんは、見えない神様に奉納する衣を織る。

「集落というのは祭事を中心にして成り立っています。他にも稲作儀礼で、米が実るように神様に祈る歌が生まれました。じゃあ、その神は何だろうというと、精神的なよりどころなんです」

「ユークイ」の「ユ」は大和言葉の「世」にあたる。富める世、豊かな世という意もあるが、それ以上に再生する生命力というような意味があるという。島の人々は節々に命を再生し、見えざるものを敬う。それは、芭蕉の木を見て

生命力を感じることでも、海に行き力をもらうことでもある。見えざる世界というのを、実感として感覚として受けとめることが生き術なのだ。

今では県外から来た人も増え、伝統的な島の人たちは高齢化が進んでいる。その中で正確に島の文化を伝承していくのは自分たちの責任かもしれない、と石垣さんは語る。ただ定まった法則性もなく、言葉に表すことも一通りではない感覚や感性、精神性を伝えるのは難しい。それをどうやって次の世代に伝えるか——答えは簡単には出ない。

「私たちは二年に一度『島人文化祭』という催しをして、手わざの人たちや、おじい、おばあたちの古謡を発表する機会を作っています。ただ、受けとる方も意識的にならない限りは難しいでしょうね。この交布織りにしても、昔のものをそのままやるだけではなく、今の暮らしの中から必要で生まれたものを反映して変わっていくかなければ残らないと思うんです」

石垣さんが布を織る上で核としているは「今の気分」だという。今を見て、心の声を反映しなければ、人がまといたいと思う布は生

み出せない。たぶんかつての女たちも自然の恩恵にあずかり、折々の気分を盛り込んだ布を織っていた。だからこそ何十年も何百年も織物文化が続いてきたのだろう。

「文化を残し、昔ながらの暮らし方を伝えていくことで、自然の尊さも実感できると思うんです。自然を守るとするのは、人や文化を廃絶することではないんです。イリオモテヤマネコを守るために山のでっぺんだけを国立公園に指定しても、あそこにヤマネコはいないですよ。田んぼがあるからヤマネコも生きられる、山が元気なところだから海は美しい、そういう循環があるんです」

自然を一番上に見て、それに寄り添いながら人間もヤマネコも鳥もいる。人の暮らしがあるから、自然もより活かされる。命を終えて朽ちるはずの糸芭蕉が、新たな生命を吹き込まれて美しい布として再生するように。

西表島の崎山村創建のときの歌に「崎山節」がある。国王の命令で島分けとなり、泣く泣く生まれ育った波照間を離れ、崎山村に移り住む、という内容。その最後の一節が印象深かった。

「居りいな居り 立ちいな立ちい

いくけーどう 居る島どう立ちいふんどう まさる（暮らしているうちに 住んでいるうちに 暮らしている所が よいと思うようになった）」

沖縄に伝わる歌は悲歌であれ、けして絶望的ではない。どこかに必ず救いがある。そういう詞が自然に湧いてくるおおもとは、島人たちの「ユ」との向き合い方があるような気がする。島人たちの歴史には苦勞も悲しみもある。けれど見えざるものを感じ取る感性を宿した彼らは、確かにずっと、大きなものにしっかり抱かれていたのではなかったろうか。



【参考文献】『琉球民俗誌』『古琉球の世界』『琉球文化と祭祀』